

言語文化学科 ドイツ語フランス語圏言語文化コース

フランス語圏言語文化領域

フランスのメディアにおける **BLM** の語られ方  
— *Le Monde* と *Le Figaro* の比較分析を通して —

文学部 2021 年度

A18LA040

かわの かずは

河野 万葉

## 目次

序論.....	4
第1章 先行研究、分析対象、アダマ・トラオレ事件と BLM の概要.....	7
1-1 先行研究.....	7
1-2 分析対象.....	9
1-3 アダマ・トラオレ事件と BLM の概要.....	10
1-3-1 アダマ・トラオレ事件の概要.....	10
1-3-2 BLM の概要.....	10
第2章 <i>Le Monde</i> の分析.....	12
2-1 運動の語られ方.....	12
2-2 参加者の語られ方.....	18
2-3 運動への評価.....	22
第3章 <i>Le Figaro</i> の言説分析.....	27
3-1 運動の語られ方.....	27
3-2 参加者の語られ方.....	32
3-3 運動への評価.....	36
第4章 比較分析、考察.....	40
4-1 比較分析.....	40
4-1-1 比較分析-運動の語られ方.....	40
4-1-2 比較分析-参加者の語られ方.....	40
4-1-3 比較分析-運動への評価.....	41
4-1-4 比較分析-共通点.....	41
4-2 考察.....	42
結論.....	45

«Traoré»を含む記事一覧 ( <i>Le Monde</i> ) .....	48
«Traoré»を含む記事一覧 ( <i>Le Figaro</i> ) .....	49
参考文献・資料一覧 .....	50

## 序論

2020年に実施された「メディア定点調査 2021」によると(博報堂DYメディアパートナーズ メディア環境研究所, 2021)、2011年における日本の人々のメディア接触時間は合計350.0分であり、2021年の合計450.9分と比較して、過去10年で100.9分増加している。2021年のこの数値は過去15年で最も高く、メディア接触時間は年々増加の一途をたどっている。ゆえに、今日では、情報伝達媒体としてのメディアが果たす日本社会での知識の共有と世論の形成における役割は、大きくなっていると考えられる。

このようなメディアに大きな役割が求められている現代において、なかでも新聞は信頼度の高いメディアとして位置付けられている。実際、2021年に実施された「第14回メディアに関する全国世論調査(2021年)」によると(新聞通信調査会, 2021)、メディアへの信頼度を100点満点で表した場合、新聞は67.7点で、最も高いNHKテレビの69点に次いで高い結果を示している。

しかしながら今日では、メディアの報道姿勢に偏りがみられることや、特定の集団に対する過剰な擁護やバッシングが目立つようになっている。また、発言の一部削除や切り貼り、情報の隠蔽、誇張表現などによる印象の操作やプロパガンダは珍しいものではなくなっている。事実、偏向報道として世の中の話題にあがり、問題として取り上げられた例がいくつもある。新聞の場合も、同じ事象を取り上げていても各新聞社によって内容には大きな違いが見受けられ、偏向性があらわれている。これらのことから、本来、情報の受け手に対して公正中立な情報を伝えると認識されているメディアは、現在では本来の役割を失い、意図的に世論を特定の方向に誘導している恐れがある。もしそうであれば、メディアは世論の形成に大きな力をもつがゆえに、大きな問題であろう。

そこで、本稿は、メディアの中立性、公正性に焦点を当て、具体的な出来事に関する報道を対象として分析を行い、今日のメディアにおけるデータを用いて考察することを試みた。分析の対象として、アダマ・トラオレ事件に端を発するフランスでのBlack Lives Matter(ブラック・ライヴズ・マター・以下BLMに省略)を取り上げる。分析対象をフランスでのBLMとした理由は、近年起きた出来事であり、人種問題というフランスにおけるセンシティブな問題に絡んでいるため、読み手がフランスでのBLMに関する情報を求める欲求は高いと想定され、情報を提供するメディアの報道の仕方が、読み手に大きな影響を与えると考えられるからである。フランスでのBLMは、2016年7月19日の夜、

パリ北方にあるヴァル＝ドワーズ県で治安部隊のひとつである憲兵隊<sup>1</sup>の強引な逮捕の後にマリ系黒人青年が亡くなったアダマ・トラオレ事件に端を発して生じたものである。また、2020年5月25日、アメリカのミネソタ州でアフリカ系アメリカ人が警察官に首を強く圧迫されて亡くなったジョージ・フロイド事件によって再拡大した。対象メディアとしては、フランスの新聞メディアである *Le Monde* と *Le Figaro* を取り上げる。対象メディアを *Le Monde* と *Le Figaro* とした理由は、フランスを代表する有力な全国紙として広く流通していること、新聞記事を検索する際に用いるデータベースが充実しており、分析対象となる記事の入手が比較的容易であるためである。データ対象期間については、ジョージ・フロイド事件後の2020年5月25日から2020年6月24日の1カ月間とし、フランスでのBLMに関連する記事を抽出し分析した。

本稿は、*Le Monde* と *Le Figaro* にあられるフランスでのBLM言説を分析、比較することによって、両紙でみられる特徴や語り方に相違があるかを明らかにし、両紙のフランスでのBLMに対するスタイル<sup>2</sup>について考察することで、フランスにおける新聞メディアの報道の公正性について検討し、メディアの実態を明らかにすることを試みる。そこで、*Le Monde* と *Le Figaro* では、どのようにフランスでのBLMと参加者が語られているのか、フランスでのBLMへどのような評価を与えているのかに注目し言説分析を行うことで、両紙がいかん公正中立を装いつつも、BLMの扱いに偏りを見せていくかについて論じる。

本稿は序論と結論を含む7章から構成されている。まず、第1章の第1節においてメディア言説に関する先行研究を展望し、これまでどのようにメディア言説が捉えられ、分析されてきたのかを示す。また、第2節において分析の対

---

<sup>1</sup> フランス国家の警察制度は、文民からなる国家警察と軍人からなる国家憲兵隊という異なる制度、すなわち、二元性を採用し、警察および憲兵隊が治安維持に当たっている。国家警察は都市部の司法警察、公共安全、情報局、司法警察活動を担っている。国家憲兵隊は国家警察の管轄外の都市部以外の農村部や都市近郊で、総合警戒活動、情報収集活動、行政警察、司法警察活動を行っている。浦中 千佳央(2020)「フランスの警察とその指導原理について(上)」

『産大法学』53, 京都産業大学法学会, pp.645-661.

<sup>2</sup> フェアクラフ(2012)はスタイルを、私たちが自身の存在の仕方を認識し、それに基づいて行為を選択することと定義している。私たちは、ディスコース(言説)で選択するスタイルによって、テキストの中で知識、アイデンティティ、社会的関係などを形成している。

象であるアダマ・トラオレ事件や BLM の概要を説明する。次に、第 2 章において *Le Monde* を対象に、第 3 章において *Le Figaro* を対象にフランスでの BLM 言説の分析を行い、語り方にみられる各紙の特徴を明らかにする。そして、第 4 章において、*Le Monde* と *Le Figaro* を先に述べた観点ごとに比較、分析したうえで、両紙の採用するスタイルについて考察を行ったのち、当該のメディア言説の分析から明らかになったことについて述べる。

## 第1章 先行研究、分析対象、アダマ・トラオレ事件とBLMの概要

### 1-1 先行研究

フランスの新聞報道や社説記事を質的に検証している先行研究の中で、フランスでのBLM言説を分析した先行研究は日本では見当たらない。そこで、本稿は、これまでどのようにメディア言説が捉えられ、どのように分析されてきたかを概観するために、メディア言説分析全般に関する先行研究を取り上げる。

倉 (2001) は、大宅壮一文庫の雑誌記事の中で、1990年代に入って日本社会に新たに登場した「外国人」であるイラン人が、どのような<異質な他者>として描かれイメージされたのかについて、<異質な他者>のイメージと異質性の対処の「技法」についての奥村 (1998) の分析方法を用いつつ、3つの時期におけるイメージの変遷を分析している。第I期では、イラン人に様々なイメージが付与されていたが、次第に「コワイ」イメージへと変化し、そこでは、他者であるイラン人が「コワイ」ため彼らとの接触を断ち「排除」すると、彼らがどのような人かよりわからなくなり、イラン人がより「コワく」という「排除」の技法がはらむ悪循環のメカニズムによって、イラン人イメージが変遷したと述べている。

大野 (2008) は、週刊誌、月刊誌、季刊誌で、滞日外国人女性を表す「ジャパゆきさん」<sup>3</sup>像がどのように社会へ発信されたのか、それがどのような「利害・価値・関心」に基づくのかを分析し、「ジャパゆきさん」をめぐる言説の社会的意味を考察している。この論文は、雑誌のカテゴリーを問わない共通性として「ジャパゆきさん」が蔑称イメージであること、日本社会にとって鏡像的他者であることを見出している。また、「ジャパゆきさん」へのまなざしの中に、「出稼ぎ」「外国人」「女性」に対する当時の日本社会でのジェンダーへの見方や排除性が示されていると指摘している。

大庭 (2010) は、朝日新聞の記事から少年事件が記事となった事件の罪種の変化を追い、加害少年の記述の仕方を分析することによって、少年へのまなざしの変化について考察している。犯罪ニュースでは、報道される罪種が「凶悪化」するに伴って、犯罪を引き起こす少年のイメージが特別な事情がある者で

---

<sup>3</sup> 1980年代初頭、出稼ぎのため日本へ流入したアジア各国の女性の呼称である。

はなく、「一般化」されるようになったと分析する。そして、このような傾向から、犯罪、非行がもはや環境による社会現象ではなく、個人が個人的な理由によって引き起こす出来事としての犯罪事件というニュース・ストーリーを生み出していると結論付けている。

学生運動、反戦運動、動物愛護運動など多様な事例を対象に、メディアにおける社会運動を分析した研究の中で、マスメディアが社会運動を報道するにあたり、ネガティブなイメージを付与する傾向があると指摘されている。Rosie & Gorringer (2009) は、マスメディアが、社会運動で訴えられる課題や運動の実態より、社会運動の攻撃性、過激さ、そして、踏み外れた価値観や見解といった側面を強調し報道すると述べている。Gitlin (1980) は、マスメディアが社会運動を報道する際、参加者に着目することによって、社会運動での目標や問題意識を彼ら個人に特有の苦難といった「個人の物語」へ矮小化する可能性を指摘している。Entman & Rojecki (1993) は、メディアが、社会運動の政治的有効性を低いものと評価し、偏った報道をすることによって、実際に社会運動による変化がみられた場合においても、運動に対して「失敗」という判断が与えられる可能性について述べている。

このような議論から、中立であると考えられているメディアは、出来事をニュースとして報道する際、その出来事についてのストーリーを生み出し語ることで、社会的意味を与えているといえよう。また、メディアが報道する際に出来事へ付与するイメージはひとつではなく、その出来事を報道するメディアごとに異なるものであり、その都度変化すると考えられるのではないだろうか。社会運動を報じる場合では、メディアの偏った先入観から、社会運動に対してネガティブなイメージが付与され、時には、社会運動それ自体ではなく、参加者、彼ら個人の背景、苦難などへと着目する対象を変化させることで、実際よりも問題を小さく、あるいは歪めて伝えているといえよう。タックマン (1978) は、様々な事柄を「事件」という出来事に変形させたものがニュースであると定義し、大庭 (2010) は、ニュースが、ニュース制作機関によって特定のフレームのもとで語られるものであると述べている。また、ミルズ (1971) は、人間は個人的に直接経験するよりも多くのことを知っており、それらの経験は常に他人から受け取った意味によって決まる間接的なものであるという。そして、間接的な経験を伝えるもの、解釈の枠組みを生み出すものを「文化装置」と呼び、その中で、出来事に関するイメージや意味、スローガンが生成、比較、維持、修正、消滅、育成、隠蔽、暴露、賞賛されるとし、それらの行為が実践される場として学校や劇場、新聞などを挙げている。このような解釈にたてば、

言説分析で、出来事の語られ方や、そこでみられる特徴を分析することによって、その出来事をめぐる言説でのメディアのスタイルを考察することができるのではないだろうか。また、メディアの報道がどのように偏っていくのかを具体的に検証することによって、メディアに接するときの注意点を明らかにすることができるのではないだろうか。このような問題関心から、本稿は2020年5月25日のジョージ・フロイド事件によって再拡大した、2020年5月25日以降のフランスでのアダマ・トラオレ事件に関するBLMに関する言説を抽出し、それがどのように語られ、メディアがどのように語り口を変容させていったのかを分析することによって、メディアはどのようなスタイルをとっているのか、また、今日におけるメディアに接する際の注意点を考察する。

## 1-2 分析対象

本稿では、メディアにおける、アダマ・トラオレ事件を発端とするフランスでのBLMをめぐる言説でみられる特徴を分析する。分析にあたり、メディアはどのようにBLMと参加者を語っているか、フランスでのBLMをどのように評価しているかに注目することで、メディアがとるスタイルについて考察する。また、本稿では、対象とするメディアを新聞記事に限定し、アダマ・トラオレ事件に端を発したフランスでのBLMに関する記事を分析している。ここで新聞を用いる理由として、次の3つが挙げられる。1つ目は、メディアの中でも新聞の普及は広く、紙面において幅広いテーマでフランスのBLMが取り上げられていることから、多くのデータを収集することが比較的容易であり、多様な言説の広がりをとらえることができるためである。2つ目は、新聞というひとつのメディアに限定することによって、変化のプロセスを分析することが可能であるからである。3つ目は、世代を問わず、メディアとしての信頼度が高いからである(総務省, 2021)。

分析対象は、フランス国内の新聞の中でも中道左派で革新的といわれる *Le Monde* と中道右派で保守的といわれる *Le Figaro* のうち「Traoré」という語を含む記事とした。記事を選別するための期間は「2020年5月25日付から2020年6月24日付まで」とした。この1カ月における記事を抽出した理由は、2020年5月25日にアメリカで起こったジョージ・フロイド事件を契機にアダマ・トラオレ事件が想起され、フランスでのBLMに関する新聞記事が集中的に多数あるからである。なお、記事収集には、*Le Monde* については *Le Monde.fr* -

Actualités et Infos en France et dans le monde を、*Le Figaro* については *Le Figaro - Actualité en direct et informations en continu* を使用した。

### 1-3 アダマ・トラオレ事件と BLM の概要

#### 1-3-1 アダマ・トラオレ事件の概要

「フランス版ジョージ・フロイド事件」と呼ばれるアダマ・トラオレ事件は 2016 年 7 月 19 日の夜、パリ北方のヴァル＝ドワーズ県、ボーモン＝シュル＝オワーズで起こった。当時 24 歳でマリ系フランス人の青年アダマ・トラオレ Adama Traoré は、憲兵隊による職務質問を受けた際、身分証を所持していなかったため逃亡を図った。トラオレは 3 人の憲兵に身柄を拘束され手錠を掛けられた後、憲兵隊詰所へ移送される車内の中で亡くなった。憲兵隊詰所内で救急隊が救命処置を行ったが、意識は戻らなかった。最初に発表された検死の結果、重症感染症が死因であると発表され、体にはいくつかの暴行を受けた跡が残っていたものの、暴行を示すものではないと結論付けられた。憲兵に対して行ったその後の調査記録には、トラオレを取り押さえる際、トラオレの体に 3 人の憲兵の体重を乗せた強い圧力がかかっていたとの記載があった。また、この時、トラオレは「*J'ai du mal à respirer.*» (息ができない) と訴えたという。トラオレが健康体であったと主張する家族や友人らは検死結果に疑問をもち、専門家に再診断を依頼したところ、トラオレは病気ではなく窒息死であると判断された。しかし、憲兵隊側の再診断では、再び死因は病死であると発表された。事件から 2 カ月後、最初に到着した救急隊の証言によると、救急隊が到着した際、憲兵隊側が主張するような回復体位は取られておらず、トラオレは手錠を掛けられた状態でうつ伏せだった。2020 年 5 月 20 日、検察側が再び死因の確認を行うが、またもや病死とされた。家族側もセカンドオピニオンの専門家に診断を要請し、その結果では、トラオレの死はうつ伏せが原因である窒息死であった。

#### 1-3-2 BLM の概要

一般的に、BLM は特定の団体ではなく、幅広い人々や組織によって構成される黒人に対する暴力と組織的人種差別に反対するキャンペーン運動として知られている。特に、白人警察官による黒人への暴力や殺害、人種による犯罪者

への不平等な扱いへの不満を訴えているといわれている。2012年2月、アメリカのフロリダ州で、当時17歳のアフリカ系アメリカ人の高校生トレイヴォン・マーティンTrayvon Martinが、自警団に不審者とみなされ射殺された。この出来事を受け、黒人の女性活動家であるアリシア・ガルザAlicia Garzaが、Facebookに“Black people, I love you. I love us. Our lives matter, Black lives matter”と投稿し、「#BlackLivesMatter」として拡散したことがBLMの始まりである。2020年5月25日には、アメリカのミネソタ州、ミネアポリスの近郊で、アフリカ系アメリカ人のジョージ・フロイドGeorge Floydが、白人警官により首を膝で強く圧迫され死亡した事件が発生した。この事件をきっかけに、BLMはミネソタ州からアメリカ全土へ拡大した。

フランスでのBLMは、2016年7月19日、治安維持組織による強引な逮捕後に起こったアダマ・トラオレ事件に端を発して広がった。2020年には、同年5月25日にアメリカで起こったジョージ・フロイド事件によって、窒息死を共通点にもつアダマ・トラオレ事件が想起され、フランス国内のBLMは再発した。2020年6月2日には、2020年5月20日にアダマ・トラオレ Adama Traoréの死因に関する異なる2つの結論を示した医学報告書が発表されたこともあり、Comité Adama (アダマの会)<sup>4</sup>を中心にパリの裁判所の前で抗議運動が行われ、約20,000人の人々が集まった。その後、フランス国内でのBLMは再拡大していった。

ここで、2016年のアダマ・トラオレ事件発生時とそれ以降から2020年5月25日のジョージ・フロイド事件までにおける、新聞メディアでみられたフランスでのBLMの報道について概説する。2016年時点においては、アダマ・トラオレ事件の概要、捜査経過、それに対するアダマ家の主張を報道していた。それ以降から2020年のジョージ・フロイド事件までは、フランスでのBLMの様子や訴えを取り上げる記事も散見されるが、記事の多くは、2016年時点と同様に、アダマ・トラオレ事件の捜査経過について取り上げていた。また、2016年のアダマ・トラオレ事件から2020年のジョージ・フロイド事件までは

---

<sup>4</sup> アダマ・トラオレ Adama Traoré の姉、アサ・トラオレ Assa Traoré が中心となって活動する団体。この団体は、La vérité pour Adama (アダマのために真実を) と命名された Facebook や Twitter のアカウントを使用し、抗議活動の参加を募り、活動を行っている。

一貫して、フランスでの BLM を司法による事件への対応の遅さや警察の暴力、失態を訴えるものとして報道していた。

## 第2章 *Le Monde* の分析

この章では、参照メディアとして *Le Monde* を取り上げ、2020年5月のフロイド事件以降に起こったフランスでの BLM の語られ方について言説分析を行う。本章で分析の対象となる *Le Monde* は、1944年に創刊されたフランスの夕刊紙である。2020年における購読者数は2,557,000人、発行部数は150,000部を記録し、フランスの主要全国紙のひとつとして認識されている。また、デジタル化の進む現代における *Le Monde* の Twitter フォロワー数は、2021年12月時点で9,820,000人である。*Le Monde* の報道姿勢については、比較的リベラルな中道左派として一般的に認知されている。

### 2-1 運動の語られ方

*Le Monde* は当初、この運動でみられる行動を強調したうえで運動を語っていたが、次第に運動でみられる言葉を強調したうえで語るようになっていく。次の引用①は、2020年5月25日のジョージ・フロイド事件によって引き起こされた BLM に呼応するように、同年6月2日に行なわれたアダマ・トラオレ事件への抗議集会を報じた翌日付の記事である。この集会は、Covid-19 蔓延防止のための大規模集会禁止の下で開催された。

①2時間の穏やかな集会の後、いくつかの事件が起こった。裁判所の広場では、催涙ガスが充満すると同時に、徐々に占拠者がいなくなっていった。また、ヴェリブ、キックボード、スクーター、ゴミ箱が燃え盛るバリケードへと変わった。バスの停留所や商店の窓は破片となって飛び散り、ようやくテラスを再び設置する権利を得た17区の小さな通りのバーやレストランは、被害を避けるために、またもや、急いですべてを

仕舞い込み、シャッターを下ろさねばならなかった。 (*Le Monde*, 2020.6.3)<sup>5</sup>

この記述からわかることは、運動が危険なものとして表象されていることである。「穏やかな集会 *rassemblement dans le calme*」であった運動が危険な「事件 *incidents*」へ変化したことを示し、その後、「穏やかな集会 *rassemblement dans le calme*」としての運動には触れず、「事件 *incidents*」としての運動について詳しく言及している。ここで、「事件 *incidents*」では、ヴェリブ、キックボードなどを狙った放火がみられ、「事件 *incidents*」はすべてを片付け、シャッターを降ろし、被害を避ける必要がある危険なものとしてあらわれている。つまり、「事件 *incidents*」は被害をもたらし、距離をおく必要があるものとして語られていることが読み取れる。また、同日付の別の記事<sup>6</sup>では、「集会が事件の原因であり、18 人の人々が逮捕された」<sup>7</sup>と記述している。「集会 *rassemblement*」を危険な「事件 *incidents*」の原因として位置付け、「集会 *rassemblement*」と「事件 *incidents*」との因果関係を提示することによって、「穏やかな集会 *rassemblement dans le calme*」に対してもネガティブな印象を付与している。

また、次に示す引用②③では、運動に対する国家の見解も提示している。なお、ここで提示する引用③は政府のスポークスマンによるものである。

---

<sup>5</sup> Après deux heures de rassemblement dans le calme, des incidents ont éclaté, et le parvis du tribunal s'est peu à peu vidé de ses occupants en même temps qu'il se remplissait de gaz lacrymogènes. Vélib', trottinettes, scooters et poubelles ont alors été transformés en barricades enflammées ; des Abribus et des commerces ont vu leur vitrine voler en éclats ; dans les petites rues du 17<sup>e</sup> arrondissement, où ils avaient enfin le droit de déployer à nouveau leurs terrasses, bars et restaurants ont dû tout rentrer en catastrophe et tirer leur rideau de fer pour éviter la casse.

<sup>6</sup> Manifestation contre les violences policières : Castaner promet « une sanction » pour « chaque faute » ou mot raciste dans la police

<sup>7</sup> Le rassemblement a donné lieu à des incidents et dix-huit personnes ont été interpellées.

②クリストフ・カスターネル内務大臣は、「暴力は民主主義とは相容れない」とツイートした。「すべての人の健康を守るために公道での集会が禁止されている中、今晚パリで起きた過度の人出を正当化するものは何もない」と述べている。(Le Monde, 2020.6.3)<sup>8</sup>

③「デモの最後には、まったく残念なことに、明らかに罰せられるべき出来事が起こり、治安維持部隊は節度をもって介入した。私たちの国には、国家によって制度化された暴力は存在しない。事件や治安維持部隊のメンバーによる過失があれば、調査が行われ、過失が証明されれば必要に応じて制裁が行われる」(Le Monde, 2020.6.3)<sup>9</sup>

引用②③の掲載されている記事では、6月2日の抗議集会が起こった経緯、抗議集会でみられた参加者の危険な行為について詳しく報じている。Covid-19蔓延防止のために、政府によって大規模な集会の禁止が発せられている中で、この運動が起こっていることを伝え、引用②のクリストフ・カスターネル Christophe Castaner 内務大臣<sup>10</sup>の見解を提示することによって、「正当化 justifie」できないものとして運動を表象している。また、運動について、逮捕者が出る程の被害をもたらすもの、治安維持部隊と対立するものと説明し、引用③で「嘆かわしい regrettables」「罰せられるべき condamnables」出来事として語っている。

---

<sup>8</sup> « La violence n'a pas sa place en démocratie, a tweeté le ministre de l'intérieur, Christophe Castaner. Rien ne justifie les débordements survenus ce soir à Paris, alors que les rassemblements de voie publique sont interdits pour protéger la santé de tous. »

<sup>9</sup> « … En fin de manifestation, il y a eu des événements qui sont évidemment condamnables et tout à fait regrettables, les forces de l'ordre sont intervenues avec mesure. Il n'y a pas de violence d'Etat instituée dans notre pays. Quand il y a des incidents, quand il y a des fautes qui sont commises par des membres des forces de l'ordre, il y a des enquêtes et, le cas échéant, des sanctions lorsque des fautes sont avérées. »

<sup>10</sup> フランスの政治家。1986年から社会党に属している。

以上のことから、*Le Monde* は当初、運動を危険で不当な一線を引かなければならないものとして語っていることがわかる。また、国家の見解を示すことによって、運動に与えるネガティブな印象を強化しているといえる。

しかし、その後、*Le Monde* は運動でみられる行為ではなく、言葉を強調したうえで運動を語るようになる。

④群衆の間では、「アダマのために正義を！」というスローガンが、「警察は殺人者だ！」という言葉に続いた。(*Le Monde*, 2020.6.5)<sup>11</sup>

⑤ジョージ・フロイドの死に端を発したアメリカでの抗議の波に続き、ここ数日、人種差別や警察の暴力に反対するスピーチが増加しているにも関わらず、大統領はそれに反応することを拒んできた。(*Le Monde*, 2020.6.8)<sup>12</sup>

⑥6月2日火曜日、「アダマのために真実を」委員会の呼びかけに応じた人々が、警察の暴力に対して、彼らの声と怒りを伝えるべく、パリ司法裁判所前に集まった。この24歳のアダマ青年は、2016年7月、憲兵隊による暴力的な尋問の後、ペルサン(ヴァル＝ドワーズ県)の憲兵隊兵舎の床で亡くなったのだ。(*Le Monde*, 2020.6.8)<sup>13</sup>

---

<sup>11</sup> Dans la foule, les slogans « Justice pour Adama ! » succèdent aux « Police, assassins ! ».

<sup>12</sup> Ces derniers jours, alors que les prises de parole contre le racisme et les violences policières se multipliaient, à la suite de la vague de protestation déclenchée aux Etats-Unis par la mort de George Floyd, le chef de l'Etat s'était pourtant refusé à réagir.

<sup>13</sup> Ils étaient tous là, le mardi 2 juin, devant le tribunal judiciaire de Paris, pour faire entendre leur voix et leur colère face aux violences policières, à l'appel du comité La Vérité pour Adama, ce jeune homme de 24 ans mort sur le sol de la caserne de Persan (Val-d'Oise) en juillet 2016, après une interpellation musclée par les gendarmes.

このように、*Le Monde* では、運動でみられる行為ではなく、運動の目的や訴えに関する事柄に触れる記事が増えていく。例えば、参加者のコメントを多数提示し、運動への参加目的や人種差別の経験を伝える記事において、引用④で、運動でみられる危険な行為ではなく、「スローガン slogans」「言葉 parole」を用いて運動での訴えについて語っている。引用⑤は、これまでエマニュエル・マクロン Emmanuel Macron 大統領が運動の訴えについて無反応であったことへの批判と、アダマ委員会が6月2日の抗議集会へ多くの人々を動員したことを称賛し、それに至った経緯を伝えた記事でみられる記述である。ここでは、無反応な国家を批判し、反対に、運動での行為を「スピーチ／発言 prise de parole」とあらわし、運動の目的を「声と怒りを伝えるべく pour faire entendre leur voix et leur colère」と記述することで、これまで語られていた運動の反社会性を排除している。要するに、これまで *Le Monde* は運動でみられる行為に着目し、運動を否定的に語っていたが、運動での目的や訴えといった言葉に着目し語るようになっていく。このことにより、読者は、運動側の動機を評価し、その行為が正当なものであるという印象を受けると思われる。

また、*Le Monde* では、フランスにおける「人種差別」の存在を事実と確認づける記述が散見される。

⑦「すべての人が同じ権利を等しくもつために戦わなければならないのは異常なことだが、世界中でこのような運動が少し広がっているのを見たおかげで、私はその戦いを信じている」とティファニーは言う。コンゴ系の両親のもと、フランスで生まれたこの看護助手は、本人いわく「時々」人種差別的な暴言を受けることがあるという。 (*Le Monde*, 2020.6.5)<sup>14</sup>

⑧微生物学を専攻する23歳のリサ・リュビオとバンド・デンネを学ぶ21歳のアンブル・パールがデモに参加するのは2度目にすぎなかった。

---

<sup>14</sup> « C'est fou de devoir se battre pour tous avoir les mêmes droits, mais en voyant ces mouvements grandir un peu partout dans le monde, j'y crois », dit Tiffany. Cette aide-soignante née en France de parents d'origine congolaise subit, « parfois », dit-elle, de violents propos racistes.

[...] 「白人女性としてこの場にいることや、私たちがたくさんいて、皆共にあることを示すことは重要なことだ」とリザは説明した。 [...] この若い女性は、パリのバルベス＝シャトールージュという庶民階級の街に住んでいる。「私は自分の証明書を確認されたことはないが、近隣の黒人やアラブ人は証明書を毎日確認されている。そこに、大変大きな問題があるといえる」と彼女は言う。(Le Monde, 2020.6.14)<sup>15</sup>

このように、*Le Monde* は参加者のコメントを引用することで、フランスでの「人種差別 *racisme*」の存在を明らかにしている。先述したように、人種差別を経験する参加者のコメントを多数報じる記事の中で、引用⑦は、コンゴ出身の両親をもつフランス出身、すなわち移民2世の看護助手が人種差別的な暴言を受けることがあるという事実を提示している。同様に、引用⑧では、運動に参加する白人女性が、黒人とアラブ人のみが日常的に証明書を確認されている事実を目撃証言として、フランスの警察や人種差別を批判的に伝える記事で提示している。つまり、*Le Monde* は目撃者・被害者である参加者の「声」を引用し、フランスでの「人種差別 *racisme*」の存在を明らかにすることによって、その存在を事実として確証し、「人種差別 *racisme*」をフランスの問題として位置付けているといえる。

以上のことから、*Le Monde* は当初、運動でみられる行為を強調し、運動に対して否定的な態度を示していたものの、次第に運動での言葉に着目するようになり、そこでは *Le Monde* の運動に対する否定的な態度はみられなくなる。また、参加者の「声」を用いることによって、フランスでの「人種差別 *racisme*」の存在を事実化、問題化することで、運動を「人種差別に関するもの」と位置付け、正当化している。要するに、運動を語る中で、*Le Monde* は運動を受容する態度を示すようになったといえる。

---

<sup>15</sup> C'était la deuxième fois seulement que Lisa Rubio, 23 ans, étudiante en microbiologie, et Ambre Barre, 21 ans, qui étudie la bande dessinée, participaient à une manifestation. [...] « C'est très important d'être là, aussi en tant que blanches, de montrer qu'on est nombreux, qu'on est tous ensemble », a expliqué Lisa, [...] La jeune femme habite le quartier populaire de Barbès - Château-Rouge, à Paris : « Je n'ai jamais eu de contrôle de mon attestation, mes voisins, noirs et arabes, eux, ont été contrôlés tous les jours ! Là, quand même, on se dit qu'il y a un gros problème. »

## 2-2 参加者の語られ方

本節では、*Le Monde* でみられる参加者についての記述を挙げ、参加者の語り方について検討する。本稿で参加者に着目する理由は、フランスでマイノリティとされる黒人への暴力と組織的人種差別に反対する BLM の参加者がどのように語られたかを明らかにすることが、両紙の報道の偏りを検証し、スタイルを考察する手掛かりとなるからである。*Le Monde* は当初、参加者が運動を起こす動機について理解を示している。初めに提示するのは、6月2日の抗議集会について、経緯や参加者の危険な行為を詳しく報じた翌日付の記事である。

①6月2日火曜日の一晩中、パリで日々裁判がなされている建物、すなわちパリ裁判所の建物の下に、多くの青少年からなる群衆が集まり、「アダマのために真実を！」というスローガンを叫び続けた。（*Le Monde*, 2020.6.3）<sup>16</sup>

運動の様子を伝え、運動に対する色付けがなされていない文脈の中で、引用①が記述されている。ここでは、参加者の総称である「群衆 *foule*」が「青少年 *adolescents*」から構成されていることを示し、「青少年 *adolescents*」を単なる「青少年 *adolescents*」とし、「青少年 *adolescents*」への色付けはなされていない。

その後、「若者 *jeunesse*」は、主体的に行動する「若者 *jeunesse*」へと変化していく。なお、国際連合と WHO の定義<sup>17</sup>から、ここでは「青少年 *adolescents*」と若者は年齢の低い世代として同一のものとする。

---

<sup>16</sup> C'est au pied du bâtiment où la justice est rendue quotidiennement dans la capitale, le tribunal de Paris, qu'une foule impressionnante, composée de nombreux adolescents et jeunes adultes, est venue réclamer « Justice pour Adama ! », selon la formule scandée toute la soirée, mardi 2 juin.

<sup>17</sup> 「青少年 *Adolescent*」を10歳から19歳、「若い人々 *young people*」を10歳から24歳、「若者 *youth*」を15歳から24歳と定めている。よって、これらが指し示す年齢層は重複している。“DEFINITION OF YOUTH”, 2015年4月12日, the United Nations [2021年12月6日アクセス]

②木曜日の夜、リールの街頭を行進しに来たのは、20年前の言い方を借りれば、「黒人、白人、ブール<sup>18</sup>」の若者たちである。怒れる若者たちであるが、希望に溢れている。(Le Monde, 2020.6.5)<sup>19</sup>

③群衆の間では、「アダマのために正義を！」というスローガンに続いて「警察は殺人者！」というスローガンが飛び交っていた。(Le Monde, 2020.6.5)<sup>20</sup>

この6月5日付の記事は、人種差別を経験する参加者のコメントを報じ、フランスでの人種差別の存在を露わにしている。引用②で参加者の総称である「群衆 foule」は、「『黒人、白人、ブール<sup>21</sup>』の若者たち jeunesse « black-blanc-beur »」によって構成されている。つまり、ここでの「若者 jeunesse」は、日常的に人種差別を経験する者、あるいは目撃する者であり、運動において、人種の違いを越えて団結する存在としてあらわれている。また、引用③では、「若者 jeunesse」を「怒れる en colère」と同時に「希望に溢れる pleine d'espoir」と形容することで、人種差別の存在する苦しいフランス社会が変化する将来を期待し、行動する者として「若者 jeunesse」を語っている。

---

<sup>18</sup> 「黒人、白人、マグレブ系」のことであり、1998年のサッカー・ワールドカップ・フランス大会で、フランス代表チームが優勝を飾った時に、チームに付けられたスローガン。多文化の選手たちが人種の差無く団結したことが、ワールドカップ初制覇へ繋がったという当時のイメージを表すために用いられた。また、フランスで統合が成功していること、フランス社会で誰もが頂点に立つことができることの象徴としても用いられた。

<sup>19</sup> C'est une jeunesse « black-blanc-beur », comme l'on disait il y a vingt ans, qui est venue défiler dans les rues de Lille ce jeudi soir. Une jeunesse en colère, mais pleine d'espoir.

<sup>20</sup> Dans la foule, les slogans « Justice pour Adama ! » succèdent aux « Police, assassins ! ».

<sup>21</sup> アフリカ北西部のチュニジア、アルジェリア、モロッコの総称であるマグレブ系移民の第2世の名称。

次に提示する引用④⑤では、*Le Monde* が「若者 jeunesse」を参加者の中心的存在として位置付けていることがわかる。

④活動家たちの列には、規範を覆すことを恐れない世代——気候のためにも行進する世代——が、「加速する意識向上化運動」に関わる数々の出来事が繋がる人種差別に対する何十年もの戦いと、アダマ委員会の4年にわたる闘争の結果の「完全な一致」、止まるどころか息切れするどころか、ますます加速する戦闘マシンに関して語られている。 (*Le Monde*, 2020.6.8)<sup>22</sup>

この6月8日付の記事は、エマニュエル・マクロン大統領への批判とアダマ委員会 *La Vérité Pour Adama* が6月2日の抗議集会に大勢の人々を動員したことを称賛し、それに至った経緯について報じている。ここで運動をあらわす「意識向上化運動 conscientisation」を加速させる中心的存在は、「ルールを変えることを恐れない *qui ne craint pas de renverser les normes*」世代、「気候のためにも行進する *qui marche aussi pour le climat*」世代である。以下に提示する引用⑤の記述によって、「気候のためにも行進する *qui marche aussi pour le climat*」世代の示す存在が明らかになる。

⑤「これまで決起したことのない」地区の若者たち、「これまで見たことのない」種族の若者たち、「この戦いと共通点があるとは想像もしなかった」「黄色いベスト」の若者たち、「世界が変わること」を望む気

---

<sup>22</sup> Dans les rangs des militants, on parle d'une conjonction d'événements participant à une « conscientisation accélérée » sur le sujet d'une génération – celle qui marche aussi pour le climat – qui ne craint pas de renverser les normes, d'une « coïncidence parfaite » après des décennies de lutte contre le racisme et quatre années de combat du comité Adama, une machine de guerre qui ne s'essouffle pas, bien au contraire.

候変動活動家の高校生たち、「この闘争の見方であることを理解し始めている」裕福な白人の若者たち。(Le Monde, 2020.6.8)<sup>23</sup>

この記述から、気候変動に対して活動を行う存在は若い世代であるとわかる。つまり、ここでの「若者 *jeunesse*」は運動の中心的存在であり、運動を鼓舞する存在として語られている。また、運動に参加する若者たちは、黄色いベスト運動<sup>24</sup>の活動家、白人など、人種のみならず多様な属性を越え結びついた人々である。次の引用⑥でも同様に、参加者が多様な属性の人々によって構成されていることを示している。

⑥デモの参加者はアダマ・トラオレのための「正義」を求める黒い T シャツや、アメリカ国歌の最中、人種差別や警察の暴力への抗議をあらわすために跪いたことで NFL のブラックリストに載ったアメリカの前クォーターバック、コリン・ケーパニックのシャツを着ていた。彼らはアダマやババカル、サブリ、ララミ、イブラヒマ、ムシン、マリク・ウッセキネ、その他多くの「警察の暴力の犠牲者」のために正義を求めるフランス語や英語で書かれたボードやプラカードを掲げていた。また、彼らは名も無きあるいは有名な人々、アダマの会の支持者や「黄色いベスト」、老若男女、黒人や白人、労働者闘争の活動家、反人種差別主義者、警察の暴力に対する戦いの古参のまた新参の活動家たちであった。レピ

---

<sup>23</sup> Les jeunes des quartiers « qui ne se mobilisent jamais », des personnalités « qu'on n'avait jamais vues avant », des « gilets jaunes » « qui n'imaginaient pas avoir des points communs avec cette lutte », des lycéens militants du climat « qui veulent que le monde change », des Blancs plus aisés aussi « qui commencent à comprendre qu'ils ont leur part dans ce combat ».

<sup>24</sup> 2018 年 11 月 17 日から毎週土曜日に行われているフランス政府への抗議運動。燃料税の引き上げ方針への反発として始まった。

ユブリック広場は満員で、太鼓の音が響き渡り、時には次々とマイクを握る演説者の訴えが聞こえなくなるほどだった。(Le Monde, 2020.6.14)<sup>25</sup>

引用⑥にみられるように、フランスの警察や人種差別を批判的に伝えた記事の中でも同様に、参加者を著名人、老若男女、黒人や白人など、多様な属性を越えて団結する人々としてあらし、彼らが運動を起こすことを正当化している。また、彼らを「満員 bondée」「マイクを握る演説者の訴えが聞こえなくなるほど empêchant parfois d’entendre les orateurs qui se sont succédé au micro」と形容し、活気に溢れる存在として肯定的に語っている。

以上のことから、Le Monde の語る「若者 jeunesse」は、当初、色付けされていない無色の存在であったが、次第に主体的で希望に満ちた存在へと変化しているといえる。また、Le Monde は参加者について、その「若者 jeunesse」を中心に多様な属性の違いを越えて団結した、活気ある人々として語っている。要するに、Le Monde は報道の経過に伴って、参加者へ理解を示し、肯定的な態度をとっていることがわかる。

### 2-3 運動への評価

フランスでの BLM を語る中で、Le Monde はフランスでの BLM をいくつもの点にわたって評価し、フランスにもたらず BLM の影響力について理解を示している。以下に提示する 6 月 4 日付の記事は、6 月 2 日の抗議集会がフラン

---

<sup>25</sup> Manifestants portant un T-shirt noir floqué demandant « Justice » pour Adama Traoré, ou le maillot de Colin Kaepernick, l’ex-quarterback américain, blacklisté par la NFL pour s’être agenouillé pendant l’hymne national américain en signe de protestation contre le racisme et les violences policières ; panneaux et pancartes en français et en anglais, demandant la justice pour Adama, pour Babacar, pour Sabri, Larami, Ibrahima, Mushin, Malik Oussekiné et bien d’autres, « victimes de violences policières » ; anonymes ou vedettes, fidèles du comité Adama et « gilets jaunes », jeunes et vieux, noirs et blancs, militants de Lutte ouvrière, antifascistes, anciens et nouveaux militants du combat contre les violences policières... La place de la République était bondée, raisonnant du son de tambours, empêchant parfois d’entendre les orateurs qui se sont succédé au micro.

ス社会に変化をもたらしつつあることを伝え、また、フランスでの BLM についての国家の肯定的、否定的、双方の見解を提示している。

①アサ・トラオレは「前例のない」集会、「歴史的な」行進について語っている。2016年7月の逮捕後、ペルサンの兵舎(ヴァル＝ドワーズ)の床で、24歳で亡くなった弟の名を冠したアダマのために真実を委員会のスポークスマンにとって、2020年6月2日という日付は警察の暴力に対する4年間の戦いの転機を刻すものだ。(Le Monde, 2020.6.4)<sup>26</sup>

この記述で、6月2日の運動が過去4年間の運動とは異なることを示し、「転機 tournant」と形容することによって、警察の暴力に対する運動の歴史は6月2日を境に異なる状態へと変化することを示唆している。ここで、運動の「転機 tournant」について詳しく言及した記事を挙げる。

## ②人種差別の告発

治安維持部隊と国民の一部の間をすでに緊迫させた2カ月間の外出禁止の後、直前になってパリ警視庁が禁じたにもかかわらず開催されたこの大規模な集会によって、警察の暴力が再び討論の中心となった。(Le Monde, 2020.6.4)<sup>27</sup>

---

<sup>26</sup> Assa Traoré parle d'un rassemblement « inédit », d'une marche « historique ». Pour la porte-parole du comité La vérité pour Adama, du prénom de son petit frère, mort à 24 ans sur le sol de la caserne de Persan (Val-d'Oise), à la suite d'une interpellation, en juillet 2016, la date du 2 juin 2020 marque un tournant dans la lutte qu'elle mène depuis quatre ans contre les violences policières.

<sup>27</sup> Accusations de racisme le rassemblement massif, bien qu'interdit à la dernière minute par la Préfecture de police de Paris, a ramené les violences policières au cœur des débats, après deux mois de confinement déjà tendus entre les forces de l'ordre et une partie de la population.

③というのも、4月以降、ほぼ毎日のように、時に人種差別的な侮辱や言葉を伴った暴力的な逮捕や職務質問を告発する動画がソーシャルネットワーク上に投稿されてきたからだ。国家警察総監部 (IGPN)は、幾度となく提訴を受けた。(Le Monde, 2020.6.4)<sup>28</sup>

④クリストフ・カスターネル内務大臣はデモの翌日に上院で行われた政府への質問の中で、治安維持部隊のメンバーによって犯された「過ち」「接触、人種差別的表現を含む言葉が、ひとつひとつ調査、制裁の対象となること」を求めた。この言葉はアサ・トラオレの耳には「小さな勝利」として聞こえた。そして、彼女は「私たちは少し理解され、変化が起こりつつある」と述べた。(Le Monde, 2020.6.4)<sup>29</sup>

⑤マイクを握ったアサ・トラオレは、6月2日以降から手にした「勝利」を歓迎した。(Le Monde, 2020.6.14)<sup>30</sup>

ここでは、フランスでの「警察の暴力 *violences policières*」と「人種差別 *racisme*」を事実として提示し、クリストフ・カスターネル内務大臣の見解を引用することで、事実化した「警察の暴力 *violences policières*」と「人種差別 *racisme*」を「過ち *faute*」として否定的に色付けている。そして、ここで「警察の暴力 *violences policières*」と「人種差別 *racisme*」が処罰されるものとして

---

<sup>28</sup> Car depuis le mois d'avril, des vidéos sont postées quasi quotidiennement sur les réseaux sociaux dans le but de dénoncer des interpellations ou des contrôles brutaux, parfois accompagnés d'injures et de propos racistes. A plusieurs reprises, l'inspection générale de la police nationale (IGPN) a été saisie.

<sup>29</sup> Interrogé lors des questions au gouvernement au Sénat au lendemain de la manifestation, le ministre de l'intérieur, Christophe Castaner, a appelé à ce que « chaque faute » commise par un membre des forces de l'ordre, « chaque accès, chaque mot, y compris des expressions racistes, fasse l'objet d'une enquête [...], d'une sanction ». Des mots qui résonnent comme « une petite victoire » aux oreilles d'Assa Traoré : « On a été un peu entendu, un changement est en train de s'opérer. »

<sup>30</sup> Au micro, Assa Traoré a salué la « victoire » obtenue depuis le 2 juin :

認識されたことを「小さな勝利」として語っている。つまり、*Le Monde* は、抗議対象である「警察の暴力 *violences policières*」と「人種差別 *racisme*」がフランスでの真実、かつ、処罰に値する問題として否定的に認識されたことを、運動が「転機 *tournant*」を迎えるきっかけとして語っている。また、運動の「勝利 *victoire*」との形容がみられることから、ここでの「転機 *tournant*」は参加者の明るい展望を示唆しているといえる。

こういった運動を肯定的に捉える記述は、他にもみられる。以下に、その記述を示す例を挙げる。

⑥6月4日の夜、リールで、ティファニー・トラウフォヌのように多くの若者たちが、ソーシャルネットワーク上の「人種差別犯罪と警察の暴力に反対する」デモへの呼びかけに応じた。AFPによると、この集会には2,000人近い人々が集まった。これは火曜日の最初のデモの時と同じ人数である。その日のパリでは少なくとも20,000人が集まり、多くの都市で起こった集会の規模の大きさは、驚くほどのものだった。 (*Le Monde*, 2020.6.5)<sup>31</sup>

⑦ジョージ・フロイドの死に端を発したアメリカでの抗議の波に続き、ここ数日、人種差別や警察の暴力に反対するスピーチが増加しているのに対して、大統領はそれに反応することを拒んできた。 (*Le Monde*, 2020.6.8)<sup>32</sup>

---

<sup>31</sup> Comme elle, beaucoup de jeunes ont répondu, à Lille jeudi 4 juin dans la soirée, à l'appel lancé sur les réseaux sociaux à manifester « contre les crimes racistes et les violences policières ». Ce rassemblement a réuni près de 2000 personnes, selon l'Agence France-Presse (AFP). C'est autant que lors d'une première manifestation, mardi. Le même jour, à Paris, 20 000 personnes au moins s'étaient réunies, et dans plusieurs villes l'ampleur de la mobilisation avait surpris.

<sup>32</sup> Ces derniers jours, alors que les prises de parole contre le racisme et les violences policières se multipliaient, à la suite de la vague de protestation déclenchée aux Etats-Unis par la mort de George Floyd, le chef de l'Etat s'était pourtant refusé à réagir.

⑧姉のアサ・トラオレは予想だにできなかった。彼女を取りまく歴戦活動家たちも同様だ。「この集結は世代が変化したことをあらわしている」とアダマの会のアルマミー・カヌーテは分析する。「彼らは若い、もっと言うところ幼い」今週末、フランスのいくつもの都市で起きた運動の拡大を、誰も予測していなかった。少なくとも総勢 23,000 人の人々がパリやリヨン、マルセイユ、リール、ボルドーなどに集まった。(Le Monde, 2020.6.8)<sup>33</sup>

ここでは、「多くの都市で起こった動員の規模の大きさは、驚くほどのものだった dans plusieurs villes l'ampleur de la mobilisation avait surpris」「スピーチが増加 les prises de parole[...]se multipliaient」「世代が変化 rupture générationnelle」「いくつもの都市で起きた運動の拡大 mobilisation, qui s'est poursuivie ce week-end dans plusieurs villes de France」といった記述がみられる。すなわち、Le Monde は、運動を動員数・参加者の世代・開催地の 3 つの観点で拡大と評価し、否定することなく運動の拡大を認める報道をしている。

以上の分析から、フランスの BLM を語る中で、Le Monde は 3 つの点で運動を拡大と評価し、運動の明るい将来を示唆しているといえる。また、Le Monde は運動のもたらす影響力について容認しているといえる。

---

<sup>33</sup> Sa sœur, Assa Traoré, ne s'y attendait pas. Ni les militants aguerris qui l'entourent. « Cette mobilisation marque une rupture générationnelle, analyse Almamy Kanouté, du comité Adama. Ils sont jeunes, voire très jeunes. » Personne n'avait vu venir l'ampleur de la mobilisation, qui s'est poursuivie ce week-end dans plusieurs villes de France. Un peu plus de 23 000 personnes au total se sont rassemblées à Paris, Lyon, Marseille, Lille, Bordeaux...

### 第3章 *Le Figaro* の言説分析

この章では、参照メディアとして *Le Figaro* を取り上げ、フロイド事件以降に起こったフランスでの BLM の語られ方について言説分析を行う。本章で扱う *Le Figaro* は、1826 年創刊のパリに拠点を置くフランスで最古の日刊紙である。2020 年における *Le Figaro* の購読者数は 1,515,000 人、発行部数は 170,000 部であり、*Le Monde* と同様にフランスの主要全国紙のひとつとして親しまれている。2021 年 12 月時点の Twitter フォロワー数は 3,000,000 人である。また、*Le Figaro* は、保守的で中道右派の新聞メディアとして広く認識されている。高馬 (2006)

#### 3-1 運動の語られ方

フランスの BLM を語る中で、当初 *Le Figaro* は運動でみられる行動を強調し、運動を消極的な出来事として語っている。まず、2020 年 6 月 2 日に起こった抗議集会を初めて伝えた第一報を提示する。この記事は集会が起こった同日付のものであるが、集会の具体的な様子が記され、それに対するクリストフ・カスターネル内務大臣と警察の否定的な見解を報じている。

①穏やかな集会が 2 時間続いた後、一部のデモ参加者と治安維持部隊の間で、事態は緊迫し始めた。現場にいた我々の記者によれば、幾人かは、実際、警察と激しく争っていた。記者は、迫撃砲の発射を目撃している。その傍らで、警察は、催涙ガス弾で応戦していた。デモ隊の一部はパリ環状道路を占領し、交通を妨げた。 (*Le Figaro*, 2020.6.2)<sup>34</sup>

---

<sup>34</sup> Après deux heures de rassemblement dans le calme, la situation a commencé à se tendre entre certains manifestants et les forces de l'ordre. Certaines personnes sont en effet venues en découdre avec la police, selon notre journaliste sur place, qui a assisté à des tirs de mortiers d'artifice. De son côté, la police a répliqué avec des tirs de gaz lacrymogènes. Des manifestants ont également pris place sur le périphérique parisien, coupant ainsi la circulation.

引用①で、運動は「穏やかな集会 *rassemblement dans le calme*」であり、反対に「占領する *pris*」「妨げる *coupant*」といった妨害をなすものである。「穏やかな集会 *rassemblement dans le calme*」と妨害をなすものという対照的な2つの側面を示すことによって、運動は2面性をもつものとしてあらわれている。

他にも、この2面性の各側面を強調する記述がいくつかみられる。以下にその例を挙げる。

②デモの参加者によって、高架になっているパリ環状道路の下や近隣の道路にいくつもの火が放たれた。火は、公共街路設備と裁判所近くの工事現場から出たゴミによって、容易く燃え上がった。(Le Figaro, 2020.6.2)<sup>35</sup>

引用②では、運動で放火がみられることを伝えている。ここで放火の様子を具体的に明らかにし、放火の標的がパリ環状線や道路といった日常生活で使用される交通インフラであることを示すことによって、運動を人々の生活に支障をきたす行為がみられる危険なものとして語り、引用①であらわれた妨害をなす運動としての側面を強調している。

また、Le Figaro は、国の要人の運動に対する否定的な見解を提示することで、さらに運動を否定している。

③クリストフ・カスターネル内務大臣は「パリで突然生じた大集会」を非難し、「暴力は民主主義では認められない」と述べた。(Le Figaro, 2020.6.2)<sup>36</sup>

---

<sup>35</sup> Plusieurs brasiers ont été déclenchés sous le périphérique parisien, surélevé à cet endroit, et dans les rues adjacentes, par des manifestants. Des feux alimentés facilement par du mobilier urbain et des débris provenant de chantiers, proches du tribunal.

<sup>36</sup> Le ministre de l'Intérieur Christophe Castaner a dénoncé les « débordements survenus à Paris » et a indiqué que « la violence n'a pas sa place en démocratie ».

④また、パリ警視庁は、「ソーシャルネットワークによって拡散されたデモの参加への呼び掛けの調子が、大集会が問題地区で起こるかもしれないと危惧させることになった」としている。(Le Figaro, 2020.6.2)<sup>37</sup>

ここでクリストフ・カスター内務大臣の見解を引用することによって、同紙は行動を「暴力 violence」とし、非難の対象としてあらわしている。引用④では、警察の見解を提示することで、運動を言い換える「大集会 débordements」が「問題地区 site sensible」で生じる可能性について言及しており、運動が貧しい低所得者の住む「問題地区 site sensible」で起こる懸念事項であると矮小化している。つまり、Le Figaro は運動を一般の人々の生活を脅かす危険で国を挙げて対処する必要がある問題、そして、フランスのあらゆる場所ではなく「問題地区 site sensible」で起こり、低所得者という特定の階層に特有の出来事として語っている。

一方で、運動の「穏やかな集会 rassemblement dans le calme」の側面について言及した記述もみられる。

⑤単なる「集会」を呼び掛けられた参加者たちは、最終的に市の中心部へと向かったが、そこでは、迅速、かつ、ばらばらながらも、概ね平穏のうちに、「みんな警察が嫌いだ」あるいは「警察はどこにでも、正義はどこにも」と叫びながら行進した。(Le Figaro, 2020.6.2)<sup>38</sup>

引用⑤では、運動の大部分が「穏やかな集会 rassemblement dans le calme」であること、一方で、警察と対立し人々の生活に支障をきたし、妨害をなす運動

---

<sup>37</sup> La Préfecture de police estime également que «la tonalité de l'appel à manifester relayé par les réseaux sociaux laisse craindre que des débordements aient lieu sur un site sensible ».

<sup>38</sup> Appelés à un simple « rassemblement », les participants se sont finalement dirigés vers le centre-ville, où ils ont défi lé rapidement et en ordre dispersé, mais généralement dans le calme, scandant « tout le monde déteste la police » ou « police partout, justice nulle part ».

は一部でのみみられたことが明らかである。すなわち、運動の大部分は平穩に行われ、人々の生活を脅かす危険な行為は一部でみられるに過ぎないことがわかる。にもかかわらず、先に示した通り、この記事では運動の危険性を強調する記述が多く、運動でみられる行動を具体的に明示、強調し、運動を国家の懸念事項と位置付けることによって、*Le Figaro* は運動を矮小化し、消極的な出来事として構築しているといえる。

その後も、*Le Figaro* は運動について否定的に記述し続けている。

⑥同盟 (警察官の過半数組合) のナンバー 2 であるフレデリック・ラガーシュは「怒りを感じている」と語った。17 区のパリ裁判所の建物下に数千の群衆が集まったアダマ・トラオレ支持のデモは、火曜の夜遅くまで乱闘騒ぎを続けたが、その翌日、彼は警察に対する攻撃があったことを告発した。 (*Le Figaro*, 2020.6.3)<sup>39</sup>

⑦被害状況：ごみ箱やバリケードがいくつも炎上。破壊者たちは、自転車や電動スクーター、そして、工事現場の重機 2 台に火を付けた。さらに、4 つの商店では、ショーウィンドーに罅を入れられたり、スプレーで落書きをされたりした。 (*Le Figaro*, 2020.6.3)<sup>40</sup>

## ⑧乱闘

---

<sup>39</sup> Frédéric Lagache, le numéro deux d'Alliance (syndicat majoritaire chez les gradés et gardiens) se dit « en colère ». Il dénonce les attaques contre la police, au lendemain de la manifestation de soutien à Adama Traoré qui a rassemblé des milliers de personnes sous les fenêtres du Palais de justice de Paris, dans le 17<sup>e</sup> arrondissement, mardi soir, conduisant à des échauffourées jusque tard dans la nuit.

<sup>40</sup> Bilan: plusieurs incendies de poubelles, de barricades. Les casseurs ont mis le feu à des vélos, à des trottinettes électriques, ainsi qu'à deux engins de chantiers. Par ailleurs, quatre commerces ont eu leurs vitrines étoilées ou taguées.

前日の談話の中で、署長は、10人以上の集いは禁止であると改めて述べたが、デモ隊通行の可能性がある道筋の商店に、閉店を要請したことを明らかにした。(Le Figaro, 2020.6.13)<sup>41</sup>

⑨しかしながら、よく統制されたスローガンのもつ力は、突如として、弾丸の発射や、衝突や、ショーウィンドーの破壊といった暴力に取って代わられた。(Le Figaro, 2020.6.14)<sup>42</sup>

⑩じき 2 週間になるが、あらゆる行き過ぎた行為への口実となる反人種差別デモにまつわる暴力行為は、紛れもなく裁かれることになる。(Le Figaro, 2020.6.14)<sup>43</sup>

引用⑥がみられる記事では、6月2日の抗議集会で暴力行為を告発された警察側によるフランスでのBLMへの批判や嫌悪感について報じている。ここで運動を「乱闘 échauffourée」とし、参加者の行為を「攻撃 attaque」とあらわすことで、参加者が暴力的であり、反国家秩序的な存在であると語っている。引用⑦は6月2日の抗議集会以降、運動が激しさを増し、緊張感の張り詰めた状態が続いていることを報じた記事でみられる記述である。運動でみられる行為は自転車、電動スクーター、商店など、フランス国民の生活に関わるものに被害をもたらし、具体的な行為内容は「被害状況 bilan」としてあらわれている。引用⑨⑩の記事では、2週間続く運動の具体的な様子と、運動を受けた国家の対応について伝えている。ここでは、運動でみられる行為は「暴力 violence」

---

<sup>41</sup> Échauffourées

La veille, dans un communiqué, le préfet de police avait rappelé que les rassemblements de plus de dix personnes étaient interdits, mais il avait annoncé avoir demandé la fermeture des commerces sur le trajet théorique du cortège.

<sup>42</sup> Mais la vigueur des slogans bien appris a vite cédé le pas à la violence tout court, avec des jets de projectiles, des heurts, des bris de vitrines. À chaque provocation, la police antiémeute répliquait par une charge ciblée.

<sup>43</sup> Une condamnation sans ambiguïté des excès qui accompagnent, depuis bientôt deux semaines, des manifestations antiracistes prétextes à tous les débordements.

であり、街を破壊する危険なものである。また、その「暴力行為 excès」について「裁かれる」ものと形容することによって、「暴力行為 excès」が行き過ぎた行為であることを示し、運動を不当なものとして語っている。

要するに、ここでは、当初みられた、運動を「穏やかな集会 rassemblement dans le calme」とする色付けは失われている。そして、運動を「乱闘 échauffourée」「暴力 violence」「暴力行為 excès」と形容することによって、*Le Figaro* はこれまで付与していた危険性に加え暴力性をも付与し、運動のネガティブな側面を強調しているのだ。

以上のことから、*Le Figaro* は当初、運動の平穏な側面をあらわしつつも、一貫して運動を否定的な出来事として語っていることがわかる。また、*Le Figaro* が運動へ与える消極性は次第に強化されていることがわかる。要するに *Le Figaro* は終始、運動を否定する態度をとっており、その態度は次第に強化されているといえる。

### 3-2 参加者の語られ方

*Le Figaro* は当初、参加者を加害者として、その後も、極左と結びつくアダマ委員会の有能性を非難し、そのアダマ委員会を中心とする属性の差異を超えた多様な人々として語るようになる。まず、6月2日に起こった抗議集会について報じた同日付の第一報を提示する。

①デモの参加者によって、高架になっているパリ環状線の下や近隣の道路にいくつもの火が放たれた。燃やされたのは、燃えやすい街路設備や裁判所の付近の建設現場の瓦礫であった。( *Le Figaro*, 2020.6.2)<sup>44</sup>

引用①では、参加者は火を放つ放火魔としてあらわれ、彼らが放火を行った場所として、パリ環状線の下や道路といった日常生活で利用される場、特に交

---

<sup>44</sup> Plusieurs brasiers ont été déclenchés sous le périphérique parisien, surélevé à cet endroit, et dans les rues adjacentes, par des manifestants. Des feux alimentés facilement par du mobilier urbain et des débris provenant de chantiers, proches du tribunal.

通網が挙げられている。放火の具体的な様子を明らかにすることによって、参加者へネガティブな印象を付与し、参加者を人々の生活に支障をきたす放火魔、すなわち加害者として色付けている。

*Le Figaro* の参加者を加害者とする否定的な語りは、他の記事でもみられる。

②フランスの警官と憲兵は人種差別主義者なのか。クリストフ・カスターネル内務大臣は、はっきりとこの考えを否定した。そして、「ひとつひとつの過ち」、あるいは警察や憲兵隊における人種差別的な言葉について「処罰」を約束した。同時に、内務大臣は、火曜のデモの破壊者たちを厳しく非難した。(*Le Figaro*, 2020.6.3)<sup>45</sup>

③警察は、警官に 2 名の負傷者が出、18 人を不審尋問し、うち 17 名を拘留したと発表した。侵入者らは、司法裁判所の下にある弁護士会館にガソリンの容器 2 つを持ち込んだとみられるが、建物は破損しなかった。(*Le Figaro*, 2020.6.3)<sup>46</sup>

引用②③は、6 月 2 日の抗議集会以降、運動が過激化し、依然として緊張感が張り詰めていることを報じた記事でみられる。ここで、参加者は商店や弁護士に被害を及ぼす「破壊者 casseurs」「侵入者 intrus」としてあらわされている。ここでも「破壊者 casseurs」「侵入者 intrus」との形容がみられることから、先に述べた、参加者を加害者として位置付ける *Le Figaro* の語り方は特徴的であり、同紙は参加者に批判的であるといえる。

---

<sup>45</sup> Le ministre de l'Intérieur s'inscrit en faux contre cette idée. Et il a promis « une sanction » pour « chaque faute » ou mot raciste dans les rangs de la police ou de la gendarmerie. Christophe Castaner a aussi fustigé les casseurs de la manifestation de mardi.

<sup>46</sup> La police compte deux blessés dans ses rangs et a pu interpellé 18 personnes, dont 17 placées en garde à vue. Des intrus auraient introduit deux bidons d'essence dans la Maison des avocats, située en bas du palais de justice, mais le bâtiment n'a pas été dégradé.

その後、参加者を加害者とする *Le Figaro* の語りはみられなくなるが、参加者についての否定的な語りは継続してみられる。

④群衆は、明らかに混淆状態であった。すなわち、地区の若者たち、学生、極左活動家、先住民擁護もしくは脱植民地主義の賛美者たち。「みんな警察が嫌いだ」という古い決まり文句で強固なものとなった「反警察」の巨大な憎しみ。あらゆる領域の人々がいるのは確かだった。 (*Le Figaro*, 2020.6.13)<sup>47</sup>

⑤結束力の強い家族を起点にカリスマ性のある姉を最前線として、経験豊富な活動家やメディアの仲介者がこの有能な集団を構成している。 (*Le Figaro*, 2020.6.15)<sup>48</sup>

⑥土曜のパリ、アダマ・トラオレ委員会から発せられたのはスローガンであった。委員会は、憲兵による尋問の後のこの青年の死について、4年来「真実」を求めている。運動は、極左に与しつつ、次第にアイデンティティと犠牲者性を明言する言説によって、ますます政治的になる闘争をリードしている。 (*Le figaro*, 2020.6.15)<sup>49</sup>

---

<sup>47</sup> Dans la foule, il y avait un évident métissage: jeunes des quartiers, étudiants, militants de l'ultra-gauche, chantres de l'indigénisme ou du décolonialisme ; beaucoup de haine « anti-flic » également, cimentée par la vieille rengaine du « tout le monde déteste la police ». Des gens de tous horizons, c'est sûr.

<sup>48</sup> Un collectif efficace, des militants expérimentés, des relais médiatiques, avec comme base de départ une famille très soudée et en première ligne, une grande sœur charismatique.

<sup>49</sup> C'est le mot d'ordre, scandé samedi encore à Paris, du Comité Adama Traoré. Depuis quatre ans, il réclame « la vérité » sur la mort du jeune homme après son interpellation par les gendarmes. Un mouvement qui, au côté de l'extrême gauche, mène un combat de plus en plus politique avec un discours identitaire et victimaire de plus en plus affirmé.

引用④は、6月13日にパリで新たな抗議集会が起こったことを受け、その動員数や参加者について詳細に報じた記事でみられる記述である。ここで、参加者の総称である「群衆 *foule*」は、明らかに「混淆 *métissage*」した状態としてあらわれている。「混淆 *métissage*」状態とは、若者や学生、極左の活動家、先住民族や脱植民地主義を称える者など、「群衆 *foule*」が多様な属性をもつ人々によって構成されていることを指す。そして、「群衆 *foule*」を「『反警察』の憎しみをもつ多くの人々 *beaucoup de haine « anti-flic »*」とあらわすことによって、属性の異なる人々は、警察への憎しみという共通点で結びついたことを示している。また、「群衆 *foule*」を「強化する」“*cimenter* (つながりを強める、団結を強める)”と形容している。つまり、*Le Figaro* は、参加者を多様な属性の人々で構成された結束力の強い「群衆 *foule*」とし、彼らの属性は異なるものの、共通して警察への強い憎しみをもっていると語っている。また、アダマ委員会が「極左団体 *extrême gauche*」と共に活動していることを、不穏な状態と批判した記事でみられる引用⑤⑥で、アサ・トラオレ *Assa Traoré* を「カリスマ的 *charismatique*」と形容し、人々を引き付け運動に尽力する存在として色付けている。アダマの会についても「有能な *efficace*」と形容することによって政治性における有能性を示し、また、運動を先導する存在、すなわち「群衆 *foule*」の中心的存在として位置付けている。

以上のことから、*Le Figaro* は当初、参加者を加害者として語っているといえる。その後、運動の中心的存在であるアダマ委員会を有能とあらわし、一見肯定的に捉えているように見受けられるものの、*Le Figaro* は中道右派であることから、極左と協働する、アダマの会を中心に多様な属性を越えて強く結びついた集団を非難していることがわかる。*Le Figaro* でみられる参加者の語り方は一貫して批判的であるといえる。

### 3-3 運動への評価

また、*Le Figaro* の語りの特徴として、*Le Figaro* は運動の広がりや強さを認め、限定的に評価するものの、否定的に伝えていることが挙げられる。例えば、以下のような記述がある。

- ①フランスでは、アダマ・トラオレ委員会によって組織された火曜日のパリでのデモが大成功を収めてから1週間も経たないうちに、週末には

パリや地方で新たなデモ行進が行われた。なお、委員会は動員を呼び掛けたわけではない。内務省が発表した数字によると、デモ隊は地方で17,800人、パリで5,500人を動員したという。つまり、公式の数字だけをみても、火曜日にパリの裁判所前だけで集まった20,000人に対して、フランス全土では23,000人が集まったことになる。これは、新型コロナウイルス感染症の蔓延を防ぐために10人以上の集まりを禁止する衛生上の緊急事態下でのことである。(Le Figaro, 2020.6.7)<sup>50</sup>

②しばしば郊外限定のものとなる戦闘的態度が数年にわたり続いた後、あらゆる予想に反して、アダマ委員会は6月2日にパリの第一審裁判所前で23,000人の人々を動員することに成功した。アダマの会は、5月25日にミネアポリスで、白人警察官に殺害されたアフリカ系アメリカ人ジョージ・フロイドの死後、世界規模の憤りの波を反映したフランスでの「警察の暴力」に対する戦いの先頭に立つことを自らに課している。(Le Figaro, 2020.6.13)<sup>51</sup>

---

<sup>50</sup> Dans l'Hexagone, moins d'une semaine après le succès surprise de la manifestation parisienne organisée mardi par le comité Adama Traoré, le week-end a été marqué par de nouveaux défi lés à Paris et en province. À noter que le comité n'avait pas appelé à des mobilisations. Selon les chiffres du ministère de l'Intérieur, contestés comme à l'habitude par les manifestants, la mobilisation a réuni 17.800 personnes en région et 5500 à Paris. Soit, en ne prenant que les chiffres officiels, quelque 23.000 personnes dans la France entière contre 20.000 rassemblées mardi devant le seul tribunal de grande instance de Paris. Le tout sous un état d'urgence sanitaire qui interdit les rassemblements de plus de dix personnes pour éviter la propagation du Covid-19.

<sup>51</sup> Après des années d'un militantisme souvent confi né à la banlieue, contre toute attente, le comité Adama, avait déjà réussi à mobiliser 23.000 personnes, le 2 juin dernier, devant le tribunal de grande instance de Paris. Il cherche à s'imposer comme le fer de lance de la lutte contre les « violences policières » en France, pour faire écho à la vague planétaire d'indignation, après la mort de George Floyd, un Afro-américain tué le 25 mai à Minneapolis par un policier blanc.

ここで、*Le Figaro* は運動を「成功 réussi」と高く評価している。ここでの評価は、6月13日にパリで新たな抗議集会が起こったことを報じた記事での記述である引用②の「23,000 人の人々を動員することに成功した avait déjà réussi à mobiliser 23.000 personnes」から、動員数に対して与えられたものだとわかる。6月2日の抗議集会以降のフランスでのBLMの概要を場所、動員数について詳細に報じた記事でみられる引用①についても同様で、集会への制限がある中、地方で17,800人、パリで5,500人という動員数を集めたことを「成功 réussi」とあらわしている。一方で、動員数以外の観点で、運動やアダマの会を評価する言及はみられない。つまり、ここでの運動への評価である「成功 réussi」は、運動での動員数に限ったものであると考えられる。

以下に示す記述では、運動の影響力への評価がみられ、それを認めるものの否定的に言及している。

③人種差別や治安維持部隊の暴力についての議論は、政治的にもイデオロギー的にも少数派によって進められている。少数派は、少数派にとっての投票や裁判で勝てないため、街に火を付けようとしているのだ。危険は大きい。(Le Figaro, 2020.6.7)<sup>52</sup>

引用③は引用①と同一の記事でみられるものであり、ここでは、「人種差別 racism」 と「治安維持部隊の暴力 violences des forces de l'ordre」に対する運動の訴えは、フランスの一部でのみ問題として扱われ、投票や裁判で訴えが承認されないことを報じている。このことから、*Le Figaro* は、運動のもたらす「人種差別 racism」 「治安維持部隊の暴力 violences des forces de l'ordre」といった抗議対象への影響力を認めるものの、影響力を阻むために、これらが少数派にのみ議論されていると否定的に語っているといえる。

上記のように、人々を運動へ駆り立てる動員力とフランスでの「人種差別 racism」 と「治安維持部隊の暴力 violences des forces de l'ordre」へ変化をもたらす力、この2点について、*Le Figaro* は運動の広がりや強さを認めるものの、

---

<sup>52</sup> Le débat sur le racism et les violences des forces de l'ordre est porté par une minorité politisée et idéologique. Comme ils ne gagnent ni dans les urnes ni dans les tribunaux, ils veulent enflammer la rue. Le danger est grand

運動の意義や主張に対して否定的な態度を示しているといえる。これは、6月7日付の記事の見出し「アダマ・トラオレ事件：人種差別と『警察の暴力』に対する中途半端な動員」<sup>53</sup>にもあらわれているといえるだろう。つまり、*Le Figaro* は運動を批判的に評価しているといえる。

---

<sup>53</sup> Affaire Adama Traoré: mobilisation en demi-teinte contre le racisme et les « violences policières »

## 第4章 比較分析、考察

この章では、実際に *Le Monde* と *Le Figaro* を比較してフランスでの BLM の語られ方の違いを明らかにすることによって、両紙のとりスタイルについて考察していく。

### 4-1 比較分析

#### 4-1-1 比較分析－運動の語られ方－

これまでの分析によって、当初、両紙における運動の語り方は共通していたものの、その後の語り方は対照的であることが分かる。*Le Monde* では当初、運動でみられる行為を強調したうえで、国家の要人による運動への否定的な見解を提示することによって、運動を危険で不当な一線を引かなければならないネガティブなものとして語っていた。その後は、運動でみられる言葉を強調したうえで、「スピーチ parole」、「スローガン slogans」、「声 voix」と形容することによって、当初運動に付与されていたネガティブな印象は失われていく。また、フランスでの「人種差別 racisme」の存在を明らかにする参加者の「声」を示すことによって、運動の訴えを正当化していく。一方で、*Le Figaro* では当初、運動を「乱闘 échauffourées」「被害状況 bilan」と形容することによって、運動について、日常を脅かす危険なもの、「問題地区 site sensible」で起こる低所得者に特有の問題として語っていた。この運動を消極的な出来事として語るという特徴は、第一報のみならず、それ以降の記述でも散見される。要するに、フランスでの BLM を語る中で、*Le Monde* が運動を正当化し受容していく一方で、*Le Figaro* は一貫して運動を不当なものとして語り、否定しているといえる。

#### 4-1-2 比較分析－参加者の語られ方－

両誌でみられる参加者の語り方からは、一貫して参加者に対する両紙の正反対な態度が確認できる。当初、*Le Monde* は参加者を「若者 jeunesse」と提示するが、その「若者 jeunesse」について色付けを行っていない。その後、「若者 jeunesse」を主体的で希望に満ちた存在として色付けをなし、参加者について、その「若者 jeunesse」を含む、多用な属性の違いを越えて団結した活気ある人々としてあらわしている。それに対して、当初、*Le Figaro* は、参加者を放

火犯、「破壊者 casseurs」「侵入者 intrus」と形容し、加害者としての位置付けを与えることによって、参加者に批判的な態度を示している。その後、*Le Figaro* は、極左と結びつき協働するアダマの会を有能と形容するが、このことは、中道右派である *Le Figaro* にとっての非難を意味している。そして、非難を示したうえで、参加者を多様な属性を越えて強く結びついた集団としてあらわしている。また、参加者の中心的存在についてのあらわし方は相違している。*Le Monde* の場合、集団の中心的存在は「若者 jeunesse」であり、「若者 jeunesse」を主体的で運動を鼓舞する存在として語っている。それに対して、*Le Figaro* の場合、集団の中心的存在はアダマの会であり、アダマの会を有能な存在として語っている。要するに、*Le Monde* の場合、徐々に参加者への理解を示し、肯定的な態度をとっているといえるが、*Le Figaro* の場合、一貫して参加者への批判的な態度を示しているといえることができる。

#### 4-1-3 比較分析－運動への評価－

*Le Monde*、*Le Figaro* 共に、運動を評価する記述がみられたものの、対照的な記述がうかがえる。*Le Monde* の場合、運動の動員数・参加者の世代・開催地の3点における拡大を高く評価し、運動の影響力を大きいものとあらわすことによって、運動を好意的に評価している。また、訴えが承認されたことを示すことによって、運動の将来への展望が明るいことを示唆している。一方で、*Le Figaro* は運動の動員数の大きさを認め、高く評価するが、運動の影響力がフランス社会へ及ぶことが考えられるため、それを懸念し阻むために、運動の訴えについてはフランスで承認されていないことを示している。つまり、*Le Figaro* は、運動の動員数や影響力を認める一方で、意図的に運動を批判的に評価している。

#### 4-1-4 比較分析-共通点-

*Le Monde* と *Le Figaro* での運動の語りにおいて、*Le Monde* と *Le Figaro* の共通点がみられる。それは、運動での抗議対象が変化していることである。両紙は当初、運動を「警察の暴力 violences policières」に反対するものとして語っていた。しかし、その後、運動は「警察の暴力 violences policières」と「人種差別 racisme」を訴えるものとしてあらわれている。*Le Monde* は当初、運動を伝える2020年6月3日付記事のタイトルを「『アダマのために正義を！』」：

20,000 人の人々が警察の暴力に反対しパリに集結<sup>54</sup>と、*Le Figaro* は 2020 年 6 月 3 日付の記事を「違法な暴力を告発された警察が『嫌悪感』を表明<sup>55</sup>と題している。また、記事の中で「人種差別 racisme」に関する記述はみられない。つまり、当初、両紙は抗議対象を「警察の暴力 violences policières」として語っているといえる。以降、両紙でみられる運動の抗議対象は変化する。*Le Monde* では、先に示した通り、2020 年 6 月 5 日付の「『人種差別犯罪と警察の暴力に反対する』デモ manifester « contre les crimes racistes et les violences policières »」、2020 年 6 月 8 日付の「人種差別や警察の暴力に反対するスピーチ de parole contre le racisme et les violences policières」、2020 年 6 月 14 日付の「人種差別や警察の暴力への抗議をあらわすために en signe de protestation contre le racisme et les violences policières」との記述がうかがえる。*Le Figaro* では、2020 年 6 月 7 日付の「人種差別や治安維持部隊の暴力についての議論 Le débat sur le racisme et les violences des forces de l'ordre」、2020 年 6 月 13 日付の「『反警察』の巨大な憎しみ beaucoup de haine « anti-flic »」、2020 年 6 月 14 日付の「反人種差別デモ manifestations antiracistes」との記述がみられる。要するに、両紙は、抗議対象を「警察の暴力 violences policières」と「人種差別 racisme」として語っているといえる。以上のことから、両紙が語る抗議対象は、「警察の暴力 violences policières」から「警察の暴力 violences policières」と「人種差別 racisme」へと変化しており、これは両紙の共通点であるとわかる。

#### 4-2 考察

以上、提示してきたように、*Le Monde* と *Le Figaro* でみられる論調は、次第に対照的なものへと変化したことが分かる。*Le Monde* の当初の論調は、運動に対して否定的な態度とるものの、参加者の動機について理解を示すことによって、中立的な姿勢をとっていた。次第に、フランスの BLM を受容する姿勢へ変化し、また、運動のもたらす影響力への理解がみられた。一方、*Le Figaro* の論調は、一貫してフランスの BLM を否定する姿勢であった。当初の加害者としての参加者の位置付けは徐々にみられなくなったが、終始、運動の危険で

---

<sup>54</sup> « Justice pour Adama ! » : 20000 personnes rassemblées à Paris contre les violences policières

<sup>55</sup> La police accusée de violences illégitimes exprime un « écoeurement »

暴力的な行動を強調し続け、運動のもたらす影響力を批判することによって、フランスの BLM を否定していた。また、両紙でみられる運動の抗議対象は「警察の暴力 *violences policières*」から「警察の暴力 *violences policières*」と「人種差別 *racisme*」へと変化していた。以上の結果から、どのようなことが考察できるのだろうか。

まず、共通点については、両紙が同様に報じていたことから、フランスの新聞メディアが抗議対象については共通した認識をもち、このことは、運動を語るうえでのフランスメディアの特徴であると考えられる。

次に、フランスの BLM について、*Le Monde* は次第に受容していき、一方で *Le Figaro* は一貫して否定している。これは、*Le Monde* が革新系の中道左派、*Le Figaro* が保守系の中道右派であるという基本的な立場があらわれていると考えられる。共和国憲法第 1 条<sup>56</sup>によると、フランスは「不可分の非宗教的、民主的かつ社会的共和国」であり、「出自、人種、または宗教による区分なしに全ての市民の法の前の平等を保護する」とする「共和国理念」をとっている。この基本原理のもとでは、フランス市民は公的な空間において階級、人種、宗教などの個人的差異によって区分されず、「単一不可分性」は確保されている。このことを考慮すると、「共和国理念」を採用するフランスで革新系左派の *Le Monde* においては、「警察の暴力 *violences policières*」と「人種差別 *racisme*」を訴えるフランスの BLM は受容されるべきものである。反対に、保守系右派の *Le Figaro* においては、「共和国理念」に肯定的であり、フランス共和国での人種差別の存在を否定する立場であるため、「警察の暴力 *violences policières*」と「人種差別 *racisme*」を訴えるフランスの BLM は否定されるべきものである。

また、*Le Monde* でみられる論調は、想定される読み手の存在が関係するとも考えられる。先述したように、*Le Monde* はフランスの BLM の参加者の中心的存在を「若者 *jeunesse*」として語っている。Alliance pour les chiffres de la

---

<sup>56</sup> Article premier

La France est une République indivisible, laïque, démocratique et sociale. Elle assure l'égalité devant la loi de tous les citoyens sans distinction d'origine, de race ou de religion. Elle respecte toutes les croyances. Son organisation est décentralisée.

La loi favorise l'égal accès des femmes et des hommes aux mandats électoraux et fonctions électives, ainsi qu'aux responsabilités professionnelles et sociales.

presse et des médias<sup>57</sup>が発表した2020年の*Le Monde*の年齢別読者層の分布を見ると、フランス国内の若者の6.0%、481,000人が*Le Monde*の読者であることがわかる。2020年のフランス新聞メディアの読者数ランキング上位9誌における若者の読者数の中で、この数値は最も高く、このことは*Le Monde*がフランスの若者の間で最も普及した新聞メディアであることを意味している。一方で、2020年の*Le Figaro*の年齢別読者層の分布から、*Le Figaro*が占めるフランス国内の若者の読者数は208,000人であり、割合では2.0%あることがわかる。これらの数値から、*Le Monde*がフランス国内の若者を、*Le Figaro*の約2.3倍も読者として獲得していることが読み取れる。要するに、*Le Monde*が運動の中心的存在とする「若者 *jeunesse*」の多くは*Le Monde*の読者であるがゆえに、*Le Monde*はフランスのBLMを受容した論調をとっているとの見方もできるといえる。

こうしたことから考えられることは、*Le Monde*では、フランスのBLMを受容し、フランス国内の「人種差別 *racisme*」の存在を問題視するという少数派寄りのスタイルが論調の根本にあることだ。*Le Monde*は参加者の「声」を引用、切り取ることを選択し、フランスでの「人種差別 *racisme*」の存在を事実として確証づけることによって、これらをフランスの問題として取り上げている。同時に、正当な出来事として運動を構築している。一方で、*Le Figaro*では、治安維持組織、すなわち国家を訴えるフランスのBLMを否定することによって、国を正当化するという右派的なスタイルが論調の根本にあるということだ。*Le Figaro*は、参加者を加害者として位置付けること、運動でみられる行動を強調することを選択し、不当な出来事として運動を構築している。

---

<sup>57</sup> フランスの新聞、定期刊行物、その他の広告媒体を含む幅広いメディアの発行部数、普及率、サイトのアクセス数などを明らかにする信頼性のある第三者機関。

## 結論

以上、本稿では、*Le Monde* と *Le Figaro* におけるフランスでの BLM の語られ方の特徴を分析し比較することによって、両紙のとり言説のスタイルを明らかにすることを試みた。その結果は以下の通りである。フランスでの BLM を語る中で、*Le Monde* の場合、フランスでの BLM を受容し、BLM がもたらすフランスへの影響について理解を示していることが明らかになった。また、*Le Monde* はフランスでみられる「人種差別 *racisme*」を国内の問題として位置付ける革新的なスタイルをとっていることも示した。一方、*Le Figaro* の場合、フランスでの BLM を否定し、BLM がもたらすフランスへの影響について批判的であることがわかった。また、*Le Figaro* は訴えの対象である国家を正当化し、保守的なスタイルをとっていることも示した。要するに、フランスでの BLM という同一の出来事を取り上げているにもかかわらず、*Le Monde* と *Le Figaro* の語りで見られる特徴は異なり、そこから読み取ることができる両紙のスタイルについても相違がみられるといえる。

以上から、同一の出来事を取り上げた記事であっても、新聞によって語り方に違いがみられることが示され、次の点が指摘される。

1 つ目に出来事を報道する際、出来事に与えられるストーリーはひとつではなく、メディアごとに異なるものであることだ。本稿では、*Le Monde* と *Le Figaro* の分析・比較によって、両紙の間で共通点が確認できたものの語り方は同一ではなく、異なっていることが明らかになった。フランスでの BLM を *Le Monde* は受容し、*Le Figaro* は否定していた。出来事を伝える際、各紙は使用する語彙や伝える内容を選択し切り取ることによって、各紙のスタイルをあらわし出来事に色付けを行っている。つまり、一般的に中立な立場で報道するものと認識されるメディアは、実際に出来事を語る際、その出来事に関するストーリーを構築し、社会的意味を与えているといえる。

2 つ目に、メディアによって構築されるストーリーは、各メディアで異なるのみならず、ひとつのメディアにおいても、その都度変化していることだ。*Le Monde* の場合、当初の記述では、参加者が運動を起こす動機については理解を示していたものの、運動を不当で危険な排除されるものとして否定的に表象することによって、中立的な立場を示していた。次第に運動に対する否定的な語りはみられなくなり、運動がフランスに与える影響力を幾点にもわたり肯定的に評価し、また、参加者にとって明るい先行きがかがえることを示唆していた。色付けのなされていなかった「若者 *jeunesse*」は、主体的で運動を鼓

舞する存在へと変化していた。それに対して、*Le Figaro* の場合、限定的に運動を評価し、参加者への肯定的な形容がみられたものの、一貫して運動を否定的に表象していた。また、フランスでの BLM を語る中で、危険性に加え、暴力性をも付与することによって、運動のネガティブな印象を強化していた。つまり、*Le Monde* の立場は中立から受容へと変化し、反対に *Le Figaro* の立場は全体として否定であり、否定的な立場を次第に強化しているといえる。

こうしたことから、出来事を報道するにあたり、新聞メディアが出来事をストーリー化することによって、真実としての出来事ではなく、歪められた出来事が読者に伝えられる可能性は否定できない。また、歪められた出来事が伝えられることによって、読者の認識は左右される可能性もありえる。こうした可能性に対して、読者側のリテラシーが望まれる。読者は、新聞メディアが一見、ものごとをありのままに報道しているようであっても、一定の視点から切り取り編集していること、伝える媒体によって内容に偏りがあること、すべての情報は誤りうる、あるいは一面的であるという認識をもつ必要がある。そうした認識のうえで、信憑性の高いデータやソースを利用することや、複数の情報源から情報を収集、比較し、自身の目で正確な情報であるのか、あるいはそうでないのかを吟味することが求められるのではないだろうか。つまり、読者側の批判的思考が重要であると考えられる。

また、インターネットが普及する現代では、新聞記事を読む手段として、購入した紙媒体だけではなく、インターネットでの検索も増加している。この場合、読者にとって重要なことは、どのような出来事が起こったのか、それが一体どのようなものなのかということであり、記事の発信元のメディアが何であるかということは重視されていない。そのため、読者は各新聞の基本的立場を理解することなく、ありのままとは異なる歪められた記事内容を客観的事実として認識してしまう。今後は、更なるインターネットの普及が見込まれるため、このような、出来事に関する事実とそれについての人々の認識に差異が生じる時代が訪れるのではないだろうか。

本稿で、*Le Monde* と *Le Figaro* におけるフランスでの BLM の語りで見られる特徴を分析し、両誌が異なるスタイルをとっていると認識することは、フランスの BLM 言説を分析した先行研究が見当たらないことを考慮すると、意味のあることであると考えられる。しかし、これらは、あくまでも限られた事例であるにすぎない。本分析で得られた結果は、分析対象や対象期間、分析手法といった様々な面で限定的であるため、さらなる分析が必要である。また、本

稿はメディアの中で新聞を対象に分析・考察を行ったが、もちろん、その他のメディアを対象にすることも必要であると考えられる。

«Traoré» を含む記事一覧 (*Le Monde*)

Le Monde 記事タイトル	日付	著者
«Justice pour Adama !» : 20000 personnes rassemblées à Paris contre les violences policières	2020/6/3	Louise Couvelaire et Henri Seckel.
Manifestation contre les violences policières : Castaner promet «une sanction» pour «chaque faute» ou mot raciste dans la police	2020/6/3	なし
La mort de George Floyd a donné un nouvel élan à la lutte contre les violences policières en France	2020/6/4	Denis Cosnard, Alexandre Lemarié, Cédric Pietralunga, Abel Mestre, Sylvia Zappi, Louise Couvelaire, Juliette Bénézit et Lucie Soullier.
«Pas de justice, pas de paix !» : à Lille, une jeunesse «black-blanc-beur» défile contre le racisme	2020/6/5	Laurie Moniez.
Violences policières : Emmanuel Macron met la pression sur le gouvernement	2020/6/8	Cédric Pietralunga.
«Ça nous dépasse et c'est ce qu'on veut» : comment le comité Adama a réussi une mobilisation surprise contre les violences policières	2020/6/8	Abel Mestre et Louise Couvelaire.
Des milliers de manifestants à Paris ont répondu à l'appel du Comité Adama	2020/6/14	Pierre Bouvier, Louise Couvelaire et Henri Seckel.

«Traoré»を含む記事一覧 (*Le Figaro*)

Le Figaro 記事タイトル	日付	著者
Rassemblement pour Adama Traoré : plus de 20.000 personnes à Paris	2020/6/2	Paul de Coustin et Thibault Izoret Masseron.
La police accusée de violences illégitimes exprime un «écoeuement»	2020/6/3	Jean-Marc Leclerc.
Adama Traoré : la tension demeure vive	2020/6/3	Jean-Marc Leclerc.
Quand les amis d'Adama s'allient aux «antifas»	2020/6/3	Jean Chichizola.
Affaire Adama Traoré : mobilisation en demi-teinte contre le racisme et les «violences policières»	2020/6/7	Jean Chichizola.
«Violences policières» : une nouvelle manifestation à Paris et des incidents	2020/6/13	Jean-Marc Leclerc.
«Antifa», «décoloniaux», «indigénistes»... la troublante nébuleuse du comité Traoré	2020/6/15	Stéphane Kovacs.

## 参考文献・資料一覧

### <参考文献>

Entman, Robert M. and Rojecki, Andrew (1993) *Freezing Out the Public: Elite and Media Framing of the U.S. Anti-Nuclear Movement*, *Political Communication* 10, pp.155-173.

Gitlin, Todd (1980) *The Whole World is Watching: Mass Media in the Making & Unmaking of the New Left*, University of California Press.

Rosie, Michael and Gorringer, Hugo (2009) *The Anarchists' World Cup': Respectable Protest and Media Panics*, *Social Movement Studies* 8, pp.35-53.

Tuchman, Gaye (1973) *Making News: A Study in the Construction of Reality*, New York: Free Press.

安彦良紀 (2020) 「ポピュラー音楽から見るフランス社会—ラップフランスの歌詞テキスト分析を通して—」, 大阪市立大学大学院文学研究科修士論文 (未刊行), 78p.

大野聖良 (2008) 「『ジャパゆきさん』をめぐる言説の多様性と差異化に関する考察-雑誌記事の言説分析をもとに」 『人間文化創成科学論叢』 11, お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科, pp.467-476.

大庭絵里 (2010) 「メディア言説における「非行少年」観の変化」 『神奈川大学国際経営論集』 39, 神奈川大学経営学部, pp.155-164.

奥田俊介 (2021) 「アメリカの人種問題を考えるための五冊」 『Artes MUNDI』 6, 名古屋外国語大学ワールドリベラルアーツセンター, pp.186-190.

倉真一 (2001) 「外国人のイメージ-日本のマスメディアにおけるイラン人を事例に-」 『宮崎公立大学人文学部紀要』 8, 宮崎公立大学人文学部, pp.71-89.

高馬京子 (2006) 「日本とフランスにおける日本人ファッションデザイナーの表象: 日仏新聞記事 (1981-1992) の言説分析を通して」, 大阪大学大学院言語文化研究科博士論文, [2021年12月29日アクセス], <http://hdl.handle.net/11094/46686>

ノーマン、フェアクラフ (2012) (日本メディア英語学会談話分析研究分科会訳) 『ディスコースを分析する—社会研究のためのテキスト分析—』, くらしお出版, p.323. [原著: Fairclough, N. (2003) *Analyzing Discourse: Textual Analysis for Social Research*, Routledge. ]

ミルズ、チャールズ・ライト (1971) (青井和夫・本間康平訳) 『権力・民衆・政治』, みすず書房, pp.322-323. [原著: C. W. Mills (1963), *Power, politics, and people: the collected essays of C. Wright Mills*, Oxford University Press.]

<資料>

「メディア定点調査2021」, 2021年5月, 博報堂メディアパートナーズ メディア環境研究所, [2021年12月9日アクセス], <https://mekanken.com/mediasurveys/>

「第14回メディアに関する全国世論調査 (2021年)」, 2021年11月, 新聞通信調査会, [2021年12月9日アクセス], <https://www.chosakai.gr.jp/wp/wp-content/uploads/2021/11/%E2%97%8F%E7%AC%AC14%E5%9B%9E%E3%83%A1%E3%83%87%E3%82%A3%E3%82%A2%E3%81%AB%E9%96%A2%E3%81%99%E3%82%8B%E5%85%A8%E5%9B%BD%E4%B8%96%E8%AB%96%E8%AA%BF%E6%9F%BB%EF%BC%882021%E5%B9%B4%EF%BC%89%E5%A0%B1%E5%91%8A%E6%9B%B8.pdf>

「令和2年度 情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書」, 2021年8月, 総務省情報通信政策研究所 [2021年10月10日アクセス], [https://www.soumu.go.jp/main\\_content/000765135.pdf](https://www.soumu.go.jp/main_content/000765135.pdf)

「ウィズコロナにおけるデジタル活用の実態と利用者意識の変化に関する調査研究」, 2021年7月, 総務省 [2021年10月10日アクセス], <https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r03/html/nd125220.html#:~:text=>

**Le Monde Lecteur au Numéro Moyen**, 配信日時不明, Alliance pour les chiffres de la presse et des médias Alliance pour les chiffres de la presse et des médias [2021年12月13日アクセス], <https://www.acpm.fr/Support/le-monde>

*Le Figaro Lecteur au Numéro Moyen*, 配信日時不明, Alliance pour les chiffres de la presse et des médias Alliance pour les chiffres de la presse et des médias [2021年12月13日アクセス], <https://www.acpm.fr/Support/le-figaro>